

家庭科教材の提案に向けた中学生の生活設計リテラシーの実態把握

Acquisition of life planning literacy for junior high school students
toward proposal of home economics teaching materials

奥 谷 めぐみ

Megumi OKUTANI

福岡教育大学

鈴 木 真由子

Mayuko SUZUKI

大阪教育大学

加 賀 恵 子

Keiko KAGA

弘前大学

大 本 久美子

Kumiko OHMOTO

大阪教育大学

(令和2年9月30日受付, 令和2年12月10日受理)

抄録

本研究は日本の中学生を対象に、生活設計リテラシーの習得状況の実態把握と性別役割分業意識やリスクに対する危機意識等がその習得に及ぼす影響を明らかにすることが目的である。2019年、4校の中学校技術・家庭科（家庭分野）担当教員に協力をいただき、質問紙調査を実施した。調査票は直接配布・直接回収し、分析対象は965名である。

調査の結果から、対人関係においては、意見を伝える・主張することや相談をすること、身の回りのモノや時間といった生活資源のセルフコントロールに困難を抱えていることが明らかになった。生活設計リテラシーの習得状況に、男は稼働労働、女は家事労働という性別役割分業意識が内面化されるほど、課題対応能力やキャリアデザイン能力の習得を阻害する可能性が示唆された。生活上の危機意識の高さは生活設計リテラシーの習得に肯定的に働くことが示された。情報収集や分析の場を設定することや、性にとらわれないロールモデルなど多様な価値や選択肢に触れる経験やリスクを想起し対策を考える実践的なパフォーマンス課題を生活設計教育の中で設定することが効果的であると提案した。

Abstract

This study aimed to understand the conditions for the acquisition of life planning literacy for Japanese junior high school students, and to clarify the influence of their sense of life risks and the value of gender role on life planning literacy. A questionnaire was conducted in 2019 with 965 students in four junior high schools during class time, with the cooperation of their respective home economics teachers.

The results indicate that junior high school students found it difficult to claim their opinion and to consult with others. Furthermore, they did not control their life resources, such as materials and time, very well. The students' internalized gender role values impeded their learning of risk management and career design. Their sense of life risks gave students an incentive to manage risk and plan their own lives.

In education aimed at teaching life planning, effective strategies include emphasizing information analysis, showing unconventional gender role models, implementing performance tasks that help students think about life risks, and suggesting practical solutions.

1. はじめに

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」⁽¹⁾において中学校技術・家庭科（家庭分野）の学習内容に「金銭管理に関する内容」の充実が目指され、平成29年告示の学習指導要領において「自立した消費者育成に向けた計画的な金銭管理能力」の育成が明記された⁽²⁾。そのために中学校技術・家庭科（家庭分野）において、生活に必要な物資・サービスを判断できる知識と価値を扱うこととなった。これまで将来の生活を見通し、経済的資源や時間といった生活資源の管理や生活設計についての学びは高等学校家庭科から扱われていた。中学校段階では、進路指導・職業体験などに関連付けてキャリアデザイン、キャリア開発に関する内容のキャリア教育が扱われてきたが、これらと技術・家庭科（家庭分野）との関連付けが積極的に行われてきたとはいえない。

若年者の生活の捉え方を見てみると2018年の「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」⁽³⁾では、「あなたは、自分の将来について明るい希望を持っていますか。」という問いに対し、日本の若年者は「希望がある18.0%」、「どちらかといえば希望がある42.6%」という回答であった。この数値は、対象となったほか6か国に比べ10%以上低い結果となっている。他にも、自己肯定感に関わる項目や将来への展望に関する項目において、他国に比べ満足度や肯定的な意見の割合が低い傾向が示されている。日本の若年者に対して、自分の将来の生活を展望し、意欲的に生活の運営しようとする知識・技能と態度を育てることが求められており、中学校における生活設計に関する教育の充実の重要性は高いといえよう。

生活設計に関する教育を扱った先行研究では、高校生を対象とした生活設計に対する実態調査⁽⁴⁾や大学生を対象に金融リテラシーの実態把握などが散見される⁽⁵⁾。高等学校家庭科では学習指導要領に生活設計に関わる内容が明記されてきたこと、大学生については若年者を狙った消費者トラブルや、生活経済上のトラブルが発生していることなどの背景がある。小学生、中学生を対象とした生活設計に関する研究は、自身の生活を客観視することが困難であるという発達段階の特性や、学習指導要領に学習内容が明記されていないことから、十分な調査研究が進められてこなかった。中学校技術・家庭科（家庭分野）において生活設計を扱うために、中学生の生活設計に対する意欲や実態を把握することが必要であると考えた。

そこで、本研究では、中学生段階における生活設計に関する教育の課題を明らかにする為に、中学生の生活設計リテラシーの習得状況とその習得に影響を与えている要素を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

2. 1. 生活設計リテラシーの定義と調査票設計

リテラシーとは「読み書きの能力」を指していたが、その意味は多義的になっている。例えば情報機器操作の能力や、情報や資料を分析し理解する能力を指す情報リテラシーや、OECDが進めるPISAでは数学的リテラシー、科学的リテラシーなど科学的なものの見方や考え方に至る表現にも用いられる。すなわち、情報を批判的に分析し、その理解に基づき、判断し、意思決定する能力に至る汎用的なスキルを示す言葉として広まっているといえよう。本論ではリテラシーの多義性を基に「生活設計リテラシー」を、これからの社会を生きる子供たちが将来を見通し、生き抜くために求められるリテラシーと位置付けたい。

具体的にその内容について先行研究を基に検討する。藤田（2014）によると、生活設計とは「その時々々の生活環境のなかで、それらを踏まえながら、個々の個人や家族の夢や生活課題、家計や家族の状況などの‘現在’の生活を見据え、‘将来’の生活を展望し、お金や人間関係、健康などの生活資源、家族の病気や死亡、災害や失業などの生活リスクを点検する」⁽⁶⁾生活技術であるとしている。

その生活設計の領域には、将来の夢や目標を模索し描くことや、ライフイベントを設立する「ライフデザインマネジメント」、経済的・非経済的・公的保障資源などの家族や個人が持つ生活資源を将来の目標や夢、持続可能性などを考慮して確保・管理する「生活資源マネジメント」、災害や事故、疾病等の生活上の様々なトラブル、不安などのリスクについて、それらを確認し、予想される被害や影響を評価し、それらに対する耐性を身につけていく「リスクマネジメント」があるとしている。これら3領域は、「ライフデザインマネジメント」を上位に位置づけ、バランスよく検討する必要があるとしている。生活設計を生活技術とするならば、これらの領域に関わる知識、理解、判断力や意思決定能力が求められるといえよう。

高等学校の学習指導要領解説においては、「人は生まれてから死ぬまでの一生を通して、各ライフステージの課題を達成しつつ発達するという生涯発達の視点からとらえ、各ライフステージの特徴などに関連付けて生活設計を立案することができるようにする」⁽⁷⁾としている。特に生涯発達というキーワードが用いら

れている。中央教育審議会の「キャリア発達に関わる諸能力の育成に関する調査研究報告書」⁽⁸⁾では、「社会の中で自分の役割を果たしながら、人らしい生き方を実現していく過程」を「キャリア発達」としている。すなわち学校教育においては、生活設計と生涯発達やキャリア発達が深く関連付けられており、学校を卒業した後、社会の中で自立した一個人として必要な能力と生活設計のために必要な能力は密接に関わっていると考えられる。同報告書では「キャリア教育」において育成を目指す基礎的・汎用的能力を「(ア) 人間関係形成・社会形成能力」, 「(イ) 自己理解・自己管理能力」, 「(ウ) 課題対応能力」, 「(エ) キャリアプランニング能力」の4つに分類している。先にも述べた通り、キャリア発達が生活設計との関係性があることから、本研究における生活設計リテラシーにおいてこの4分類を援用することとした⁽⁹⁾。しかし、調査項目の作成にあたり、今回の調査は中学生を対象とするため、生活実態に即した項目作成が必要であると考えた。そこで、中学校段階では具体的にキャリアを計画する能力ではなく、自身の将来に対して希望的な展望を抱えているかを図ることとした。これを受けて能力の名称を「(エ) キャリアプランニング能力」から「(エ) キャリアデザイン能力」とし、調査項目も将来の生活に対するイメージに関連する項目を設定した。

さらに、生活設計教育に求められる教育内容や身につけるべき能力について、志村・佐藤(2005)は、高等学校家庭科教員12名に対するヒアリング調査を実施している。この調査から、家庭科教員が目指す生活設計教育を通して身につけさせたい力は、①社会的自己実現、共生意識、思いやりの心、②自立(精神的・経済的・生活的・社会的自立)、個人的自己実現、③時間的展望、④主体的な生活者・消費者としての自覚、⑤意思決定力・自己決定力、⑥具体的、客観的な職業観・勤労観、⑦社会性、⑧現実的的確な把握、分析力、⑨生活を総合的に捉える力であることを明らかにしている⁽¹⁰⁾。

これらの先行研究を踏まえ、本研究における生活設計リテラシーとは、「将来の生活を展望し、短期的・長期的な生活資源を管理する力、生活上のあらゆるリスクを回避したり、対応したりする力、個人や家族の夢の実現に向けライフイベントを創る力からなり、それらを総合的に活用して生活を捉え、キャリアをデザインする力」とした。生活設計リテラシーを4つの分類に整理した(表1)。表1にはリテラシーごとの説明および対応する調査項目と志村・佐藤(2005)による生活設計で身につけさせたい能力を提示している。さらに、右側の列には藤田(2014)による生活設計の3領域との関連性を灰色で示している。

調査目的は中学生が身につけている生活設計リテラシーの実態を把握すること、次に生活設計リテラシーの習得状況に影響を与える要因を明らかにすることの2点である。まずは、生活設計リテラシーの(ア)～(エ)の4分類に対して、それぞれ5項目の設問を作成し、その習得状況を得点化し全体の傾向を把握することとした。

次に生活設計リテラシーの習得に影響を与えていると推察される要素について先行研究を基に整理し、分析方法について検討した。

仲田・久保・石井(2016)らは、「女性の職業参加への肯定的意識」と「男性の家事・育児参加への肯定的な意識」に対して、生徒の身の回りの家庭環境、母親や家族というロールモデルによる影響があることを明らかにしている⁽¹¹⁾。村雲・大本(2014)も、大学生に対する意識調査から、大学生が描く生活設計には性別役割分業意識に基づく記述がみられることを明らかにしている⁽¹²⁾。これらの先行研究から生活設計におけるライフデザインの領域において性別役割分業意識が与える影響は大きいと判断した。すなわち生活設計リテラシーにおいても、その習得のしやすさは生徒が持つ「性別役割分業意識」に影響を受けるものであると考えた。性別役割分業意識に基づく価値観が内面化されているほど、ライフイベントにおける選択肢が性別によって左右され、生活設計に対しての肯定的な意識や学習意欲が阻害される可能性を考慮した。そこで、調査項目から性別役割意識を得点化し、標準偏差 $\pm 1\sigma$ の範囲に含まれる生徒を中間群、それ以上の得点を高群(性別役割意識に基づく価値観を内面化していない群)、それ以下の得点を低群(性別役割意識に基づく価値観を内面化した群)とした。3群間の生活設計リテラシーの習得の傾向を比較することとした。

続いて、仲田・久保(2012)は高校生を対象に生活設計に対して積極的態度に影響を及ぼす要因について「家族環境要因」、「自分についての肯定的評価」、「仕事や家族、不測の事態についての不安」、「仕事や家族形成についての具体的な目標や希望の有無」との関連性を質問紙調査によって分析している⁽¹³⁾。その結果、「自分についての肯定的評価」及び「仕事や家族、不測の事態についての不安」の両方が、生活設計への積極的態度に影響していることを明らかにしている。今回は「リスクに対する危機意識(不安)」に焦点を当てた。しかし、生活設計の3領域としてリスクマネジメントが含まれているという点からも「リスクに対する危機意識(不安)」について、過度にリスクを恐れるとライフデザインや生活資源管理における意思決定

表1 生活設計リテラシーの説明と調査項目一覧

能力の分類	能力の説明	生活設計教育に関わる能力	本研究で作成した調査項目	ライフデザイン	生活資源	リスクマネジメント
(ア) 社会形成能力	社会性や共生意識、他者を思いやり、理解しようとする能力を指す。他者とのコミュニケーションを図ったり、受け入れたりすることで、人間関係資源の形成や管理をすることができている。	①社会的自己実現、共生意識、思いやりの心 ④主体的な生活者・消費者としての自覚 ⑦社会性	<ul style="list-style-type: none"> ● 友達の相談にのったり、悩みを聞いてあげたりする ● 人の話を聞くとときに相づちを打つ ● 自分と違う意見や考えを受け入れる ● 誰かとコミュニケーションをとる際には、自分から話しかけることが多い ● 自分一人ではできないことがあれば、誰かに相談する 			
(イ) 自己管理能力	目標設定や状況に応じて自分自身が所有する時間やお金、モノなどのあらゆる生活資源の管理ができる能力を指す。意思決定力・自己決定力・主体性といった力とつながる。	③時間的展望 ⑤意思決定力・自己決定力	<ul style="list-style-type: none"> ● おこづかい帳をつけている ● 朝誰かに起こされなくても1人で起きることができる ● 忘れ物をする事が多い ● LINEやゲームなどをやめなければならないときにすぐにやめることができる ● 自分の目標に向けて努力する 			
(ウ) 課題対応能力	リスクを確認、評価し、対応したりする能力および耐性を指す。短期的・長期的に将来を見通すことや、身の回りの生活資源や情報の取捨選択能力につながる。	②自立（精神的・経済的・生活的・社会的自立）、個人的自己実現 ⑤意思決定力・自己決定力 ⑧現実的的確な把握、分析力	<ul style="list-style-type: none"> ● 外出時は、天気予報を確認し、雨に備えて傘を持っていく ● 長期休み（夏休み、冬休みなど）には、計画をたてて実行することができる ● インターネットの情報の中には間違っているものがあると思う ● トラブルがあったとき、原因を探る ● 一つの方法がうまくいかなかったとき、別の方法でやってみる 			
(エ) キャリアデザイン能力	将来の生活において自分自身が何を重視したいのかという展望や自身の生活と社会とのつながりを把握することができる能力を指す。自分の生きたい人画像を描くことができている。	②自立（精神的・経済的・生活的・社会的自立）、個人的自己実現 ④主体的な生活者・消費者としての自覚 ⑥具体的、客観的な職業観・勤労観 ⑨生活を総合的に捉える力	<ul style="list-style-type: none"> ● 可能な限り働いていたい ● 社会のために役立つことがしたい ● 経済的に豊かな生活をしたい ● 自分の能力を生かして働きたい ● 幸福な家庭をつくりたい 			

に影響を及ぼすことが示唆される。一切のリスク管理ができないことも生活設計上の課題となりうる。そこで、リスクに対する意識のバランスが適切であることが望ましいと考える。仲田・久保（2012）の調査研究の調査項目の一部を参考にし、「リスクに対する危機意識（不安）」の程度を得点化し、標準偏差の $\pm 1\sigma$ の範囲内の危機意識のグループを中間群、それ以上の得点のグループを高群、それ以下の得点のグループを低群に分類し、3群間の生活設計リテラシーの習得状況を比較することとした。

2. 2 調査票の配布及び回収について

先述の生活設計リテラシーの獲得状況について実態を把握するため中学生を対象とした質問紙調査を実施した。大阪府3校、福岡県1校の中学校に依頼し、各学校の技術・家庭科（家庭分野）担当教員に生徒への直接配布、回収を依頼した。期間は2019年1月～2月である。大阪府A、B、C中学校3校では1年生355名、2年生393名の有効票が回収された。有効回答率は89.5%である。福岡県D中学校では1年生105名、2年生112名の有効票が回収され、有効回答率は90.4%である。欠損値を有するデータを除外し、分析となる有効回答票は965名分である。それぞれの地域と、性別属性との関連性は表2のとおりである。分析にはIBM SPSSStatistic22.0を使用した。

表2 回答者属性（性別及び回収地域）

		女	男	合計
		人数(人)	人数(人)	人数(人)
福岡	人数(人)	111	106	217
	割合(%)	51.2%	48.8%	100.0%
大阪	人数(人)	400	348	748
	割合(%)	53.5%	46.5%	100.0%

3. 研究結果および考察

3. 1. 中学生の生活設計リテラシーの習得状況

生活設計リテラシーの習得状況について、結果を図1に示す。

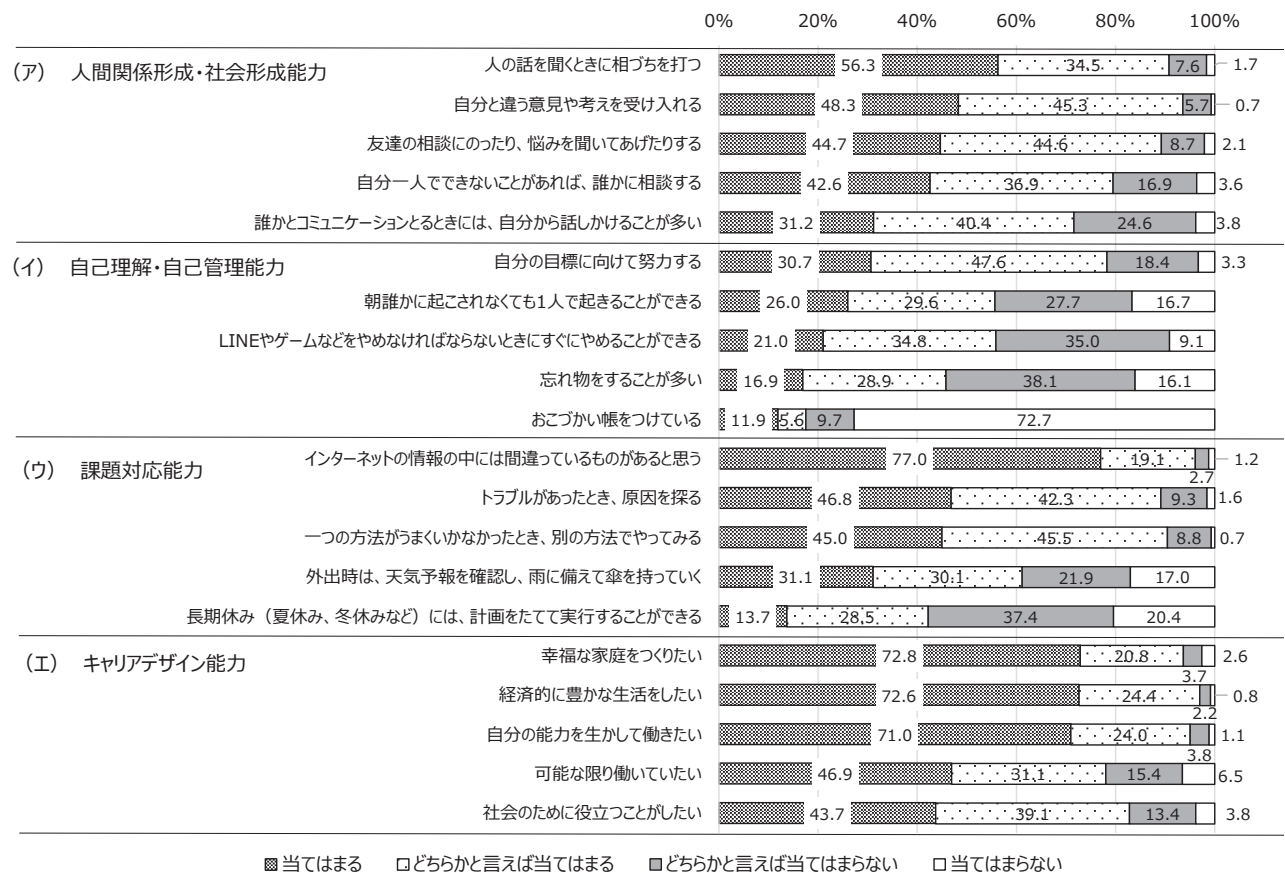


図1 生活設計リテラシーの習得状況

「インターネットの情報には間違っているものがあると思う」、「幸福な家庭をつくりたい」、「経済的に豊かな生活をしたい」、「自分の能力を生かして働きたい」という項目において、「当てはまる」が7割を超え、肯定的回答は9割を超えた。情報リテラシーの定着、肯定的な将来像への希望を抱えていることが確認できた。

一方で、「おこづかい帳をつけている」、「長期休み（夏休み・冬休みなど）には、計画をたてて実行することができる」において「当てはまる」という回答が2割を超えておらず、「忘れ物をすることが多い」において「当てはまらない」という回答も2割を超えていない。さらに「LINEやゲームなどをやめなければならないときにすぐやめることができる」に対する肯定的な回答は、他項目に比べ相対的に少なくなっている。この点から、時間やモノといった身近な生活資源の管理に課題を抱えている様子がうかがえる。

続いて、4能力の分類間の習得状況を比較するため、「当てはまる」を4点として得点化した。なお、「忘れ物をするが多い」は逆転項目処理をした。その結果、分野別の平均点はそれぞれ（ア）人間関係形成・社会形成能力16.4点、（イ）自己理解・自己管理能力12.5点、（ウ）課題対応能力15.5点、（エ）キャリアデザイン能力17.4点となった。特に（イ）自己理解・自己管理能力について、得点の低さが際立った。先に述べた通り、時間の管理やモノの管理に課題があることが得点の低下につながったと考えられる。さらに、（エ）キャリアデザイン能力にかかわる得点が高くなったことから、自分の目指す生き方を明確に有している傾向が示された。このことから、将来に対する漠然とした見通しは持っているものの、身近な生活資源の管理の手法やその必要性について学ぶ機会の設定は必須である。

各分野の回答傾向に着目し特徴的な点について考察していく。まず、（ア）人間関係形成・社会形成能力において、他者の話を聞こうとしたり、価値観を受け入れようとしたりする受容的な態度は身につけているが、相対的に他者への相談や積極的なコミュニケーションには課題を抱えていることが明らかになった。相談などの積極的な態度は、人間関係資源の形成につながり、生活におけるあらゆるリスク回避に必要な能力であるといえる。生活設計の学習においても他者とのつながりをつくるコミュニティの形成の仕方、リスクに直面した際の相談先と相談の仕方を扱う事に意義があると考ええる。さらに（ウ）課題対応能力において、インターネットリテラシーの項目以外の「当てはまる」という項目を選択した割合が5割を超えていない。トラブルが発生した際の対策や、トラブルが起こるかもしれない状態に対する情報収集など、リスクマネジメント能力が十分身につけていないことが示された。

さらに、生活設計リテラシーの習得状況と、性別・学年・地域、各属性との関連性についてt検定により有意差を検討した。表3に結果を示した。

地域及び性別による差が顕著に表れた。福岡および女性の方が、生活設計リテラシーの習得率が高い傾向を示した。ただし、地域差は回収数の差及び大阪は回収地が3か所であり、正確な地域差であるとは言い難い。

続いて、男女間の差について（ア）では他者の価値を受容したり、相談に乗ったりすると

いった能力において有意に女性の得点が高い傾向が示された。（イ）は忘れ物の頻度や、LINEやゲームをすぐにやめられるかといった身近な生活資源のセルフコントロールについて、顕著に女性の得点が高くなっていた。（ウ）、（エ）で特徴的な項目として、働き続けること、社会の役に立ちたいという意識において、女性の得点が高い傾向が示された。社会貢献や、市民意識について、女性の意欲の高さが示唆された。

表3 回答者の属性と生活設計リテラシー得点のt検定結果

		地域		学年		性別	
		福岡	大阪	1年生	2年生	女	男
(ア)	得点	16.9	16.2	16.3	16.4	16.9	15.8
	有意確率	***				***	
(イ)	得点	12.8	12.4	12.6	12.4	12.8	12.1
	有意確率	*				***	
(ウ)	得点	15.8	15.4	15.7	15.3	15.8	15.2
	有意確率	*		*		**	
(エ)	得点	17.4	17.4	17.4	17.4	17.6	17.2
	有意確率					*	

***...p>0.001 **...p<0.01 *...p<0.05 有意差0.1%未満グレースケール

3. 2. 生活設計リテラシーに性別役割分業意識がもたらす影響

生活設計リテラシーに影響を与える要素として、調査設計の中で触れた通り、性別役割分業意識があるにとらえた。また関連する項目として人の性質が女性に必要なものか、男性に必要なものを問うジェンダー観に関する設問を設定した。性別役割分業意識は稼働労働や家庭内労働の分業の希望や、男らしさ女らしさの捉え方について尋ねている。

ジェンダー観について、結果を図2に示した。素直さやユーモアなどは、どちらにも必要な要素であるにとらえているのに対して、料理という家庭内の労働は女性に、リーダーシップ、収入の多さといった要素は男性に必要であるという意識があることが確認できた。従来型の男女に求められる性別役割分業とつながる項目であり、一部の中学生は性別役割分業意識に影響を受けていることが伺えた。

性別役割分業意識について図3に結果を示した。回答者の92.9%が「家事や子育ては父親と母親が一緒にするのが良い」と両性が協力し合って家庭生活を運営しようとする意識を持っていることが明らかになった。一方で、男女という性別が仕事の得手不得手に影響があると考えている割合が77.3%，男性らしく・女性らしくといった考え方に賛成している回答が25.8%となっている。

「そう思う」を4点として、1～4点の点数化を行った。性別役割分業に基づく価値観が内面化されていないほど得点が高くなるよう「男が向いている仕事，女が向いている仕事それぞれある」及び「男は男らしく，女は女らしくという考え方に賛成である」という項目は逆転項目として処理した。

得点を基に、内面化されていない得点が高いグループⅢ 124名（12.8%），中間のグループⅡ 684名（70.9%），内面化されている得点が低いグループⅠ 157名（16.3%）の3群に分類し、生活設計リテラシーの得点を分散分析（Tukey）で比較した。（ア）～（エ）の分類別の比較の結果を図4に示す。

最も内面化されていないグループと、内面化されているグループでは、全てのリテラシーの分類で有意差が検出された。

「そう思う」を4点として、1～4点の点数化を行った。性別役割分業に基づく価値観が内面化されていないほど得点が高くなるよう「男が向いている仕事，女が向いている仕事それぞれある」及び「男は男らしく

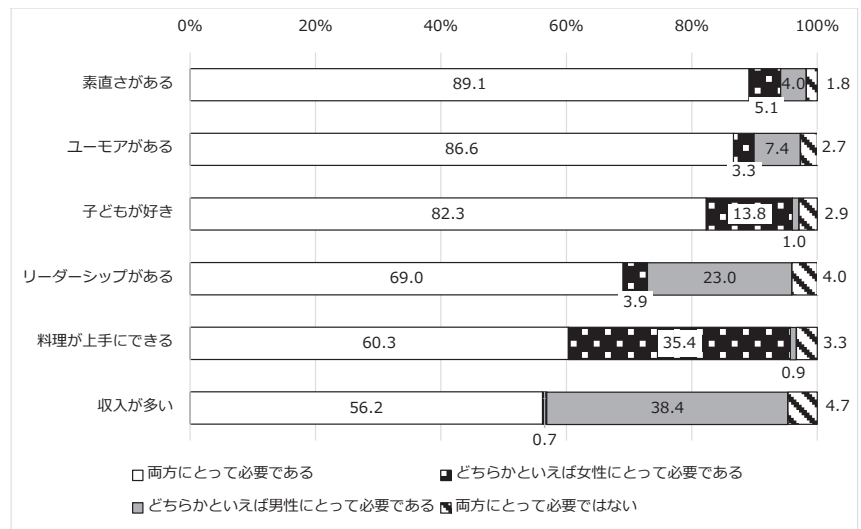


図2 ジェンダー観に対する意識

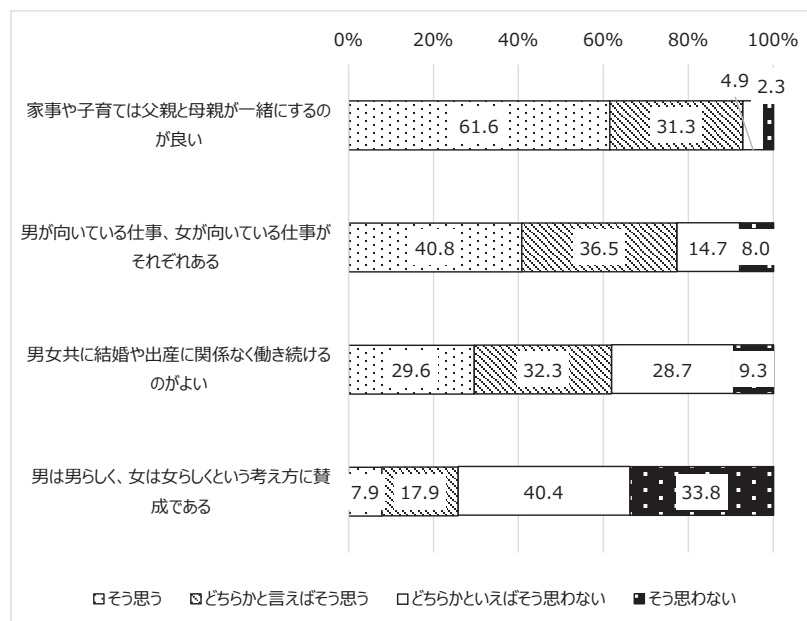


図3 性別役割分業意識

しく、女は女らしくという考え方に賛成である」という項目は逆転項目として処理した。

得点を基に、内面化されていない得点が高いグループⅢ 124 名 (12.8 %), 中間のグループⅡ 684 名 (70.9 %), 内面化されている得点が低いグループⅠ 157 名 (16.3 %) の 3 群に分類し、生活設計リテラシーの得点を分散分析 (Tukey) で比較した。(ア) ~ (エ) の分類別の比較の結果を図 4 に示す。

最も内面化されていないグループと、内面化されているグループでは、全てのリテラシーの分類で有意差が検出された。

特にグループ間の得点差が顕

著に検出されたのは (ウ) 課題対応能力と、(エ) キャリアデザイン能力であった。(ウ) 課題対応能力においては、長期休みの管理以外のすべての項目でグループⅠとⅢの間に 5% 以下の有意差が確認できた (Ⅲ > Ⅰ)。(エ) では、働き続けたい、社会の役に立ちたい、能力を生かしたいという項目において、グループⅢがⅡ及びⅠと比べ有意に得点が高くなった (Ⅲ > Ⅱ, Ⅲ > Ⅰ)。

性別の役割に捉われず多様な選択肢や可能性を考え、選択できる能力は、事前に多様なリスクの可能性を予想し対応する選択肢を考えられる力が身についていることと同義であるといえよう。性別役割分業意識が内面化されているグループにとって自身の持つ性別に将来像が左右され、就労の意欲を持つことそのものが阻害されている可能性が懸念される。すなわち、生活設計の学習を進めるにあたり、性別役割分業意識の解消を目指した学習題材の設定が求められる。そのためには、男は稼得労働、女は家庭内労働といった従来型のロールモデルではなく、多様な生き方、性にとらわれない考え方を具体的に示すロールモデルを提示することが必要である。さらに、それらのロールモデルから多様な生き方を実践するために必要な社会構造や、生活資源などを探究したり、提案したりする活動を取り入れることが有効であると考えられる。

3. 3. 生活設計リテラシーとリスクに対する危機意識との関連性

生活上のリスクについて、どの程度考えることがあるかを尋ねた結果を、図 5 に示す。

生活上のリスクについて、就職に対する不安を抱えている割合が、63.0%と他項目に比べ相対的に高いことが分かる。一方で、災害や事故といった、身近で予防・被害軽減の対策ができるリスクについては、その可能性を考えていないとする回答が 80.6%となった。身近な報道などで災害が起きていることは理解しているが、それが自身の身に起こりうる可能性を予想できていないことが伺える。すなわち、リスクマネジメン

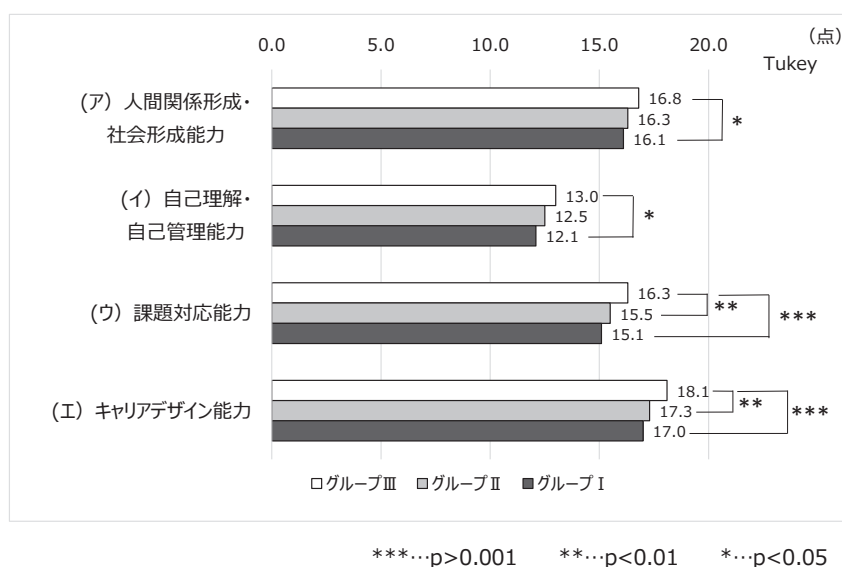


図 4 生活設計リテラシーの習得状況と性別役割分業意識との関連

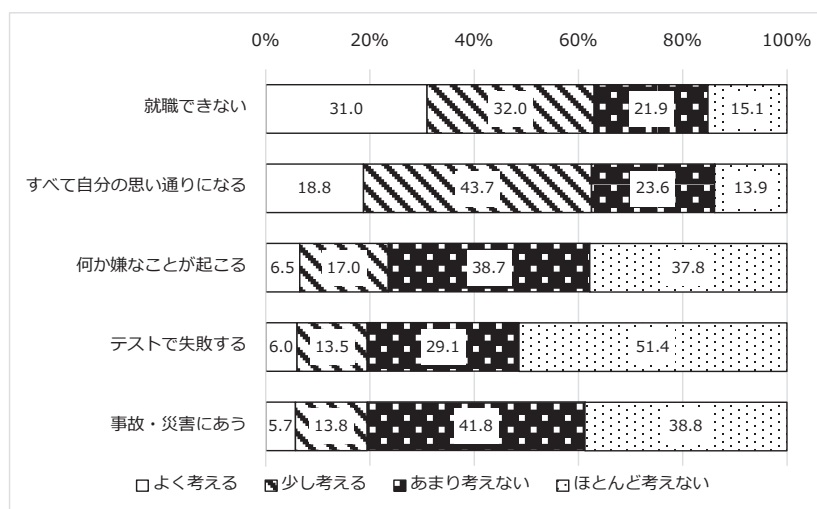


図 5 生活上のリスクに対する危機意識

トの方法や必要性を想起することも困難であることは自明である。生活の中で起こりうるリスクや危険性を探し出す活動や、地域や家庭での対策に触れる経験が重要である。

さらに、このリスクに対する意識について、不安感の高さによるグループ分けを行うため、「よく考える」を点数が最も高い4点とした。20点を満点として、危機意識の高いグループiii 221名(21.9%)、中間層のグループii 628名(65.1%)、危機意識の低いグループi 126名(13.1%)の3群に分類した。生活設計リテラシーの分類別の得点及び、20項目の得点に対して、分散分析(Tukey)を行った。分野別の得点傾向を図6に示した。

結果、(ウ)課題対応能力、(エ)キャリアデザイン能力において、危機意識の高いグループiiiとグループi間に得点の有意差が検出された。グループiの得点が有意に低い結果となった。さらに強すぎる危機意識は生活設計の阻害要因となりうるという仮説を立て、3群間での比較を行ったが、グループiiとの有意差は確認できず、リスクに対する危機意識の高さは生活設計リテラシーの習得に肯定的な影響を及ぼしていることが示された。中学生の生活環境としてリスクがそもそも身近ではない事、リスクが家計・家庭生活の運営に与える影響を想起し管理しなければならない主体意識がない事など、危機意識そのものが阻害要因になり得るほどのものではない可能性が示唆される。

(ウ)課題対応能力では、「外出時は、天気予報を確認し、雨に備えて傘を持っていく」においてグループiii、グループiの間で有意差があり、「インターネットの情報の中には間違っているものがあると思う」において、グループiiiとii、iiiとiの間に有意差が確認できた(iii > ii および iii > i)。危機意識の高さは、生活の中で情報を収集し分析する力と関わることを示されたといえよう。

また、(エ)キャリアデザイン能力については「可能な限り働いていたい」、「自分の能力を生かして働きたい」においてグループiiiの方が、有意に得点が高い傾向が示された。危機意識の高さは働き続けることや、能力を活かした就労イメージを持つことに繋がっている。「終身雇用、年功序列」という就労環境が一般的な価値観ではなくなったことから、生活基盤の安定性を求めた際に就労環境がそのセーフティーネットになり得ないことを理解し、不安を抱えていることが伺える。このような社会情勢において、リスクに対して家庭・社会にそれぞれ活用できる生活資源やセーフティーネットがあること、それらを活用する方法を具体的に検討するパフォーマンス課題を設定することが有効であると考ええる。パフォーマンス課題はリスクを自分事として認識し、さらに被害を回避・軽減する策があることを知識として理解する上で、有効な手段であると考ええる。さらに、学習指導要領の改訂においても、生活場面に焦点を当てた問題解決型学習の重要性が提示されており、これらの学習活動において理想のライフイベントに必要な生活資源を整理したり、ライフイベントに関連するリスクの対策を考えたりする経験を取り入れた教材を開発する必要がある。

最後に、「インターネットの情報の中には間違っているものがあると思う」の項目において、性別役割分業意識が内面化されておらず、危機意識を持っている群の得点が有意に高い傾向にあることが示された。このことから、多岐にわたる情報を収集し、分析し、批判的に読み解こうとする情報リテラシーの習得を意識付けた教材設計は生活設計リテラシーの習得にも有効であると考ええる。

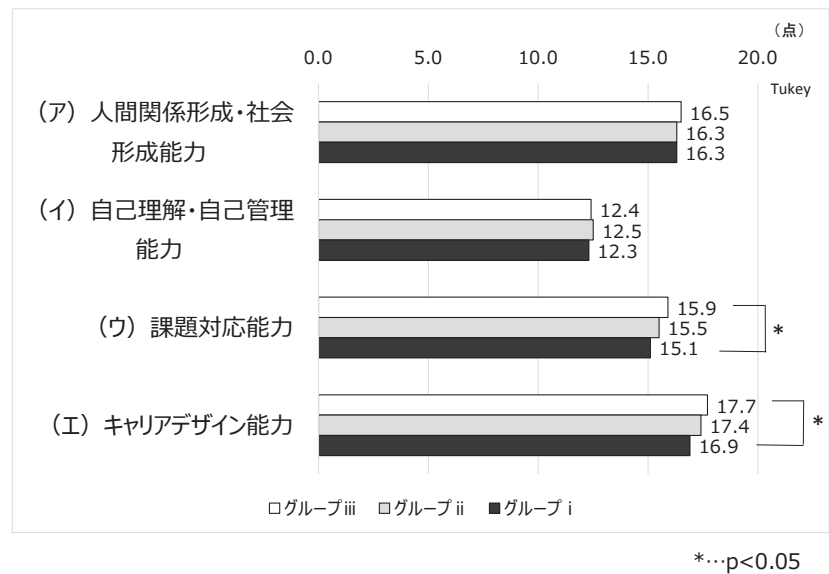


図6 生活設計リテラシーの習得状況とリスクに対する危機意識との関連

4. まとめと今後の課題

本研究では、中学生の生活設計リテラシーの習得状況の把握、また性別役割分業意識及び生活上のリスクに対する危機意識がその習得に及ぼしている影響を明らかにすることを目的とし、福岡県1校、大阪府3校の中学校における質問紙調査を実施した。調査結果から明らかになったことと、今後の生活設計教育や教材に必要な視座を整理する。

生活設計リテラシーの習得状況の全体傾向として（ア）人間関係形成・社会形成能力や（エ）キャリアデザイン能力の得点が高く、他者の価値観を受容し、相談に乗る態度が形成されており、将来に対する漠然とした見通しを持っていることが明らかになった。しかし、他者に相談し、積極的に他者と関わろうとするコミュニケーションに課題があること、（イ）自己理解・自己管理能力及び、（ウ）課題対応能力の得点が相対的に低く、時間やモノなどの身の回りの生活資源の管理の能力及び、リスクマネジメント能力が十分身につけていないことが明らかになった。

続いて、これらの生活設計リテラシーの習得に性別役割分業意識及び生活上のリスクに対する危機意識が及ぼす影響を検討した。

まず中学生が持つジェンダー観、性別役割分業意識について確認した。男女が協働して家庭生活を運営しようとする考えを9割の中学生が持っていることが明らかになった一方で、男性が稼働労働、女性が家庭内労働を担おうとする旧来型の性別役割分業観も30～40%程度の割合であり、仕事の内容によって性別に向き不向きがあると捉えている中学生が77.3%であることが明らかになった。またこれらの性別役割分業意識が自分の価値観として内面化されている程度を得点化し、3群に分けて得点の傾向を分析した。その結果、性別役割分業意識が内面化されるほど、生活設計リテラシーの習得の阻害要因になっていることが明らかになった。（ウ）課題対応能力、（エ）キャリアデザイン能力の得点が顕著に低くなっており、リスクマネジメント能力は多様な選択肢を想像する力や意思決定できる力と直結していること、性別役割分業意識にとらわれるあまり自らの将来像の多様な可能性を想起できず、就労の意欲を持つことそのものが阻害されている可能性が懸念される。すなわち、生活設計教育において、多様な生き方、性にとらわれないロールモデルの提示によって、固定概念を解消する必要性が示された。

続いて、生活上のリスクに対する危機意識と生活設計リテラシーの習得に与える影響を検討した。就職に対する不安感の強さが明らかになった。将来の自らの生活設計に不安を感じていることが伺えた。危機意識を持っていない状態と、危機意識が強すぎる状態は、将来の生活に対する見通しを阻害する可能性があるという仮説を立てた。そこで性別役割分業意識同様、回答を得点化し3群に分け、生活設計リテラシーの得点との関連性を明らかにした。結果、危機意識の高い群の得点が高い傾向が示された。特にリスクマネジメントに関する能力や、就労イメージに関する項目において、不安意識が高いほど、得点が高くなることが明らかになった。生活上のリスクに対して、リスクそのものを自分にも関わるものであると捉え、リスクを回避・軽減するための生活資源やセーフティーネットについての理解を深める学習の設定が必要であることが伺えた。

今後の課題として、中学校技術・家庭（家庭分野）に追加された金銭管理に関わる学習内容につながる授業開発や教材開発が必要であると考えられる。本研究で示された通り、生活設計には個々の子供が持つ生活環境が影響することから、学習題材の設定や教材開発は困難であることは自明である。中学校技術・家庭科（家庭分野）の教員への支援として、生活設計リテラシーに焦点をあてた支援の必要性は高いといえよう。ライフイベントをデザインする経験を他者と共有する学習は多様な価値観や選択肢に触れる機会ともなることから、その教育効果の高さも期待できる。中学校段階において、いかに「絵空事」で終わらせない人生設計を展開し、将来に対する期待と意欲を持たせる提案につなげていきたい。

本研究はJSPS 科研費「生活設計リテラシーの習得に向けた家庭科教材及びカリキュラムの開発」（科研番号 17K04862：代表鈴木真由子）の助成を受けている。

【引用及び参考文献】

- (1) 中央教育審議会 (2016), 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申), 183 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2020.9.28 閲覧)
- (2) 文部科学省 (2017), 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 技術・家庭編 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_009.pdf (2020.9.28 閲覧)
- (3) 内閣府 (2019), 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査, 第 2 部第 1 章人生観関係, <https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h30/pdf-index.html> (2020.9.28 閲覧)
- (4) 仲田郁子・久保桂子・石井美穂 (2016), 高校生の男女共同参画意識にみる家庭科教育の課題—生活設計領域の学習を中心に—, 日本家庭科教育学会誌, 58(4), 222-231
- (5) 小山内幸治・西尾圭一郎・北野友士 (2016), 大学生を対象とした金融リテラシー調査票の作成と調査結果について, 経済教育, 35(35), 136-148
- (6) 藤田由紀子 (2014), 第 2 章 リスク社会の生活設計—リスクを乗り越え, 将来を見つめる手段としての生活設計, 「生活設計の今日的課題と今後のあり方」研究報告書, 29-40
- (7) 文部科学省 (2018), 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説 家庭科編, 24
- (8) 中央教育審議会 (2011), 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申), 25-26
- (9) 大本久美子・鈴木真由子・加賀恵子 (2019), 小・中学生のジェンダー意識と家庭生活観, 日本家庭科教育学会近畿地区会 50 周年記念誌, 19-26
- (10) 志村結美・佐藤文子 (2005), 高等学校家庭科における生活設計教育, 千葉大学教育学部研究紀要, 第 53 巻, 131-137
- (11) 仲田郁子・久保桂子・石井美穂 (2016), 高校生の男女共同参画意識にみる家庭科教育の課題—生活設計領域の学習を中心に—, 日本家庭科教育学会誌, 58(4), 222-231
- (12) 村雲拓・大本久美子 (2014), 高等学校家庭科における「生活設計」の学習内容の検討—大学生の職業労働と生活に関する調査より—, 生活文化研究, 51, 61-74
- (13) 仲田郁子・久保桂子 (2012), 高校生の生活設計への積極的態度に影響を及ぼす要因と指導法の検討, 日本家庭科教育学会誌, 55(1), 25-33

